



## 『釜山市菜城遺跡鍛冶遺構』

弥生時代、倭人は朝鮮半島の鉾山から鉄を得て、北九州に持ち帰っていた。こんな風に考えると、鉄の供給源が明白になり、納得が出来ます。それら倭人の行動力や技術力を改めて感じます。白村江の戦（663年）以前は朝鮮と倭の間に明確な国境はありませんでした。どちらも、海を渡るだけで親戚や友人の住む島や半島に渡れたのです。

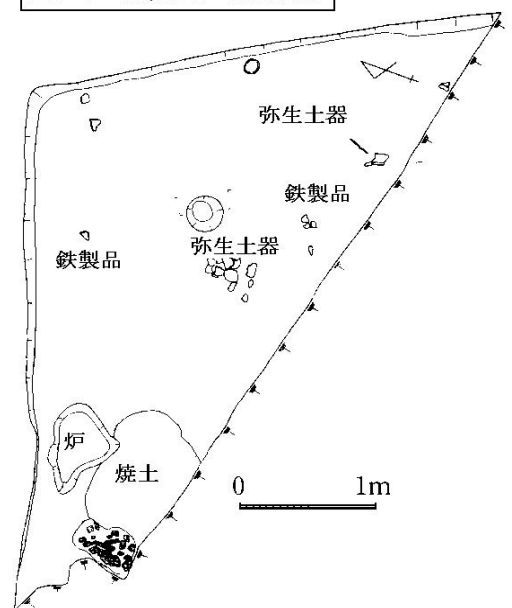
播磨風土記には新羅の国の王子、天之日矛（天日槍＝あめのひぼこ）が播磨の国神「伊和（いわ）大神」と領地争いをしたことが記されています。又、日本書記には素盞鳴尊（すさのおのみこと）が五十猛命（いそたけるのみこと）をともない、新羅の曾尸茂梨（ソシモリ）に天降り、後に木の種を何種類も持ち帰って国々に植えた話が、記されています。これらのことがすべて事実だとは思いませんが、話の元になる事象があり、倭と朝鮮の交流があったのは明白です。

鉄の欲しかった倭人が海を越え、朝鮮の鉄山に出向いたのも当然のことと思われる。

『倭人と鉄の考古学』には釜山市の菜城遺跡の鍛冶遺構から弥生時代の土器が出土したことが、以下のように記されています。

釜山市の菜城遺跡の鍛冶遺構からは、鉄素材と思われる長さ6.3センチ、幅4.4センチ、厚み1.5センチの鉄塊が出土している。この遺構からは特異な出土品がある。出土土器の94%が北部九州の弥生時代中期前半の土器です。この鍛冶遺構を含む住居の集まりが、倭人の生活空間と評価されています。おそらく鑄造鉄器のリサイクルに加えて鍛造鉄器生産を開始する時期に、北部九州の倭人が弁辰地域において鉄素材の仲介を果たしたにちがいない。

釜山市 菜城遺跡 鍛冶遺構



### 白村江の戦（はくすきのえのたたかい）

663年、朝鮮南西部の白村江で、東アジアを揺るがす一大決戦が行われました。唐・新羅（しらぎ）、倭国（九州王朝）・百済（くだら）の二つの連合軍による、朝鮮半島の権益を巡る大決戦は、唐・新羅連合軍の勝利に終わりました。

### 新羅（しらぎ）

はじめて朝鮮を統一した王朝（BC57～935）。「しんら」「シルラ」ともよぶ。もと朝鮮半島南部の辰韓（しんかん）地域のうち、慶州（キョンジュ）付近にできた小王国で、4世紀中ごろに力をのばして国号を新羅とした。以後、北の高句麗、西の百済とあらい（三国時代）、7世紀、唐とむすんで百済・高句麗をほろぼし、のち唐の軍隊をしりぞけて、676年に朝鮮半島を統一。935年、高麗にほろぼされた。

### 参考資料

倭人と鉄の考古学 村上恭通 青木書店 1999年  
<http://www.lifeinkorea.com/Information/history1j.cfm>

ホームページと電子メールをご利用ください。

URL <http://www2.memenet.or.jp/kinugawa/>  
<http://www.kanamono.co.jp/ryou@memenet.or.jp>

**むらの鍛冶屋**®



何でもお気軽にお尋ねください！！